

# 文化

## 沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

石原 昌家

〈19〉

1975年5月、糸数アブラガマの見取り図作成のため、ゼミ生たちとほじめて洞窟内調査を実施した。その洞窟が沖縄戦追体験の

集落に迫ってきたので、糸数アブラガマ内の南風原陸軍病院分室は解散した。收容されていた負傷兵のなかで、腹ばいになっても脱出できた兵士の残りは、枕元に「自死用青酸カリ」が置かれた重傷患者たちであつた。そのなかのひとり

が日比野勝廣元日本兵であつた。その日比野傷病兵が奇跡の生還を遂げ、その体験を手記に残してあつたことも連載18回(5月17日)で

大きな『うじ』で群れをなしていた。どこから来たものか、あたりを見まわしたとき、ふと隣の吉田君(東京)がいつのまにか死んで

きた。熱心に調査を続けていた。熱心に調査を続けていた。熱心に調査を続けていた。熱心に調査を続けていた。熱心に調査を続けていた。

## 日比野傷病兵の手記

# 悪臭の中、死におびえ

## 爆風で飛ばされ生還

野傷病兵は、来るべき時がきたと観念した。「看護婦さん、看護婦さん、うじをとつてくれ」、とうなり続

この姿になるのかと恐ろしい戦慄のときが続いた。それでも水を求める私は手

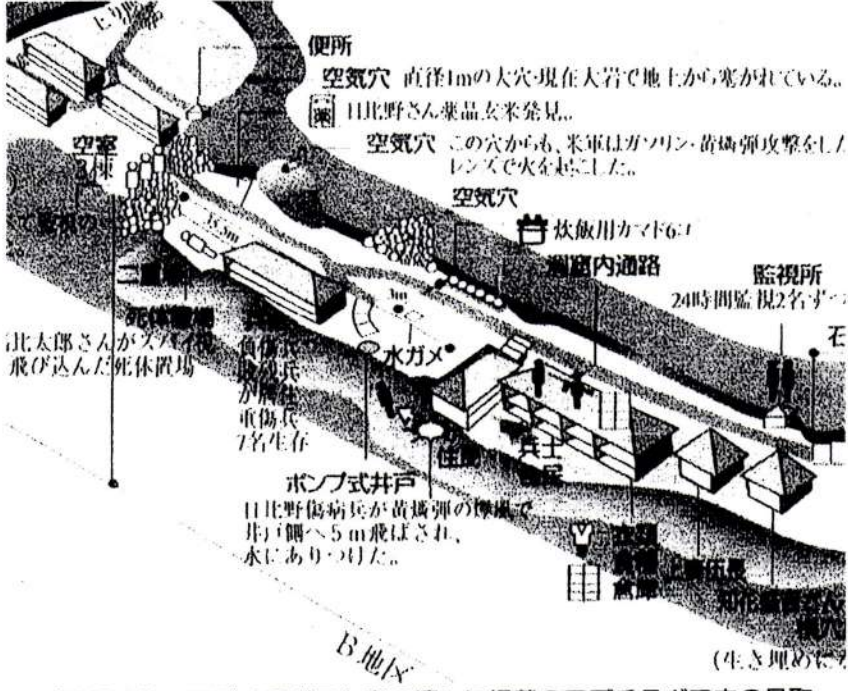
なつた。悪臭とつめき声以外の、水の音と暗闇だけは、沖繩戦当時のままだつた。

### 水の音と暗闇

日比野傷病兵の手記をたよりに、私は日本軍の掘った井戸あたりの水の流れの位置から、5分ほどの南側に日比野傷病兵が横たわつていたのであつたと、想像で

### 専門学校生引率

1975年4月に開校した沖縄歯科衛生士学校で



『沖縄の旅・アbruchagamaと轟の壕』に掲載のアbruchagama内の見取り図。日比野勝廣傷病兵は中央の井戸付近に爆風で吹き飛ばされた

『死期が刻々と迫るのを感して望みを失った者はつぎつぎと自決したり、絶叫を

ある日、向こう側の上部にある空気穴から黄燐弾が投入され、大音響と共に

私は証言とあわせたガマの暗闇体験は、沖縄戦追体験の場となり、平和を考える場になると確信していた

が、43年後、当時の生徒から直接それが聴けたのは幸い

だった。(次回は21日掲載)